

自由と責任

創立八十七周年記念式々辞

大塚節治

一
本日ここに來賓各位のご臨席を得、教職員、学生生徒一同、相会し、創立八十七周年の記念式典を挙げ得ますことは、誠に同慶に堪えません。

同志社が明治八年、本月本日、新島丸広小路の新島先生仮宅において、僅かに六名の学生を得て（後二名参加）祈りをもつて出発して以来、正に八十七年たちました。

その間、外には官民の思想的圧迫あり、内には意見の対立、感情の齟齬による紛争相次ぎ経営はしばしば窮地におちいり、それは真に受難と荊棘の途でありました。

この風雪に堪え来たものは、同志社を愛する内外の有志の支援と、天職と使命に対する信仰に立ち、薄給に甘んじて、母校を支え来た教職員の赤誠によるものであって、われらは今、創立者の遺業を育て来たこれらの人々に対して、深甚なる感謝を捧げたいと存じます。

さらにその背後には、常に雲の柱となり、火の柱となつて、わが学園を導き給ひし見えざる神のみ手のあつたことを思い、われらは敬虔なる感謝の祈りを捧げたいと存じます。

さて、同志社は今日八十七年の星霜を経ましたが、その内終戦にいたるまでの七十年間は、真に伸々とした率直なる信念の発表をなしえなかつたのであります。それができるようになつたのは、終戦以後のことです。明治維新以来、日本が世界列強に伍して行くためには、国を富まし、兵を強くせねばならないと考え、ここから国家至上主義が生じ、国家の中心としての天皇が絶対化され、ついに現人神、すなわち神の現化とされるにいたりました。昭和十二年、日支事変発生前後から、しばしば、キリスト教の神と天皇とは、いづれが上かと言う愚問がキリスト教徒に向つて発せられ、キリスト教徒が明白にその所信を発表し難き事情におかれたのであります。

しかるに、終戦の翌年正月、天皇陛下自ら、朕は神でなく、



人間であるとの声明をなされました。もはや今日は、天皇とキリスト教の神と、いずれが偉いかというような愚問を發する者はありません。政治的にも、主権が人民にあるという、いわゆる、民主主義が日本国憲法によりて保証されました。同志社がわが世の春を迎えたというべきであります。私は今、民主主義について、論議をいたそうとは思いません。ただ、二つのことについて、特に皆様のご注意を喚起したいと存じます。

二

一つは、民主主義の根本たる人格尊嚴の信念と、二は、新憲法の平和についてであります。そもそも人格尊嚴の思想は、東洋では人は万物の靈長であるという考えに表われ、西洋では、人間は理性的存在であるという考えに現われ、キリスト教では、人間は神の像を有すという考えに表われております。今日、宇宙進化の道程において、人間が最高の存在であることは、科学的にいい得ることでありますが、それが最も尊いということとは、価値的の信念であつて、正常の価値意識なき人にとつては、無意味なことでもあります。今はかかる人を相手として考える必要はありません。さて被造物の内、人間が最高の尊さをもつという、その人間の本質はなにかと申せば、法律的にいえば、権利義務の主体であり、道徳的にいえば、自由と責任の主体であるといえます。権利と義務、自由と責任とは、ともに表裏をなすもので、一方だけあつて他方がないものは、それは偽物であります。権利と自由だけあつて、義務と責任のなき社会は無政府的社会、猛獣の社会であります。また、義務と責任のみあつ

て、権利と自由のなき社会は、奴隸の社会であります。

しかるに、この一對の觀念には大きな相違があります。権利と自由とが個人に存すべき限界を越えて主張要求される時は、他人のそれを侵害せずしては行われず、他人に迷惑を及ぼすこととなるが、これに反して、義務と責任とは個人に課せられたものを越えて行われても、他人のそれを侵害することは稀で、むしろ他人を益するものである。一里の行程を求められたら、二里行けとの教訓、「重荷を負える者はわれにきたれ。われ汝らを休ません」との言葉は、これを言つたものであります。

個人の生活にせよ、一家の生活にせよ、あるいは一國の歴史にせよ、すべて難局を切り抜け、これらを隆興せしめるものは、この義務と責任の精神であります。今日は、権利と義務の精神と、自由と責任の精神がともにアンバランスとなり、そのために、社会の健全なる発達が阻害されているのではないかと思われまふ。ことに、教育の社会において、その感が大であります。私どもは、わが國、民主主義の健全なる発展とわが学園の興隆のために両者のバランスを保つて行きたいと思ひます。私が皆様の注意を喚起したい一つのこととは、すなわち、これでありまふ。

三

今一つは、平和についてであります。昨年、の記念週間において、私は「永久の平和」について説教をいたしました。今日は学園の平和について、皆様の注意を喚起いたしたいと存じます。わが学園は、新島先生永眠後、しばしば大きな紛争があり、そ

のために、あるいは募金の機会を失い、あるいは有能なる多くの人材を失い、少なからず損失を蒙ったのであります。

終戦以来、約十七年、幸に大きな紛争はなく平和を保つてはきましたが、しかしながら余りにもいろいろな政治的闘争、またはデモが多く、なんとなく学園に落着きがなく、研究と理想にふさわしき静けさを欠いている感じがいたします。

ある人々は、これは学園に活気が溢れている証拠として賞讃し、満足するかもしれませんが、私は研究と修養とを主とする学園は、今少し、落ちついた静かな空気が必要かと思えます。これが教授方の研究に妨げとならねば幸であります。ピケによつて修学や授業の権利を蹂躪されるようでは、楽しい研究はできないのではないかと考えます。

同志社大学は大学の看板をかかげて、すでに本年は満五十年になります。また、その研究の業績は十分とはいへませんが、私自身の経験によれば、負け惜みのようではありませんが、たびたびの紛争によつて学問的研究がかき乱されたことに大きな原因があると思えます。

私は学問の府にふさわしき空気の醸成につき、とくに学生諸君の反省と配慮を願うものであります。中、高の生徒諸君も一生懸命に勉強し、国家有用の人となつて下さい。私が六十年前、十六歳の時、同志社にきましたのは諸君のような時でありました。歳月は人を待たず、今の内に十分勉強されんことを望みます。

四

学園は今、三年後に迎える九十周年を目ざして、十五億という大きな記念事業を遂行中であります。そのうち、五億円はすでに、昨年の夏、学校債によつてこれを得、残り十億円の募金約四分の一を完了しております。教職員諸氏の寄付申込が六百万円を越えておりますことは、感謝に堪えません。

願わくば、お互が権利とともに義務を、自由とともに責任を重んじ、かつ互に尊敬と友愛の精神に立つて学園の平和を保ち、研究と人間形成にふさわしき空気をつくり、かつ、記念事業に支障のおこらないように協力を賜わり、もつて学園の発展、飛躍に貢献されるよう、御願いたします。

最後に本年は女子大学教授の中村貢氏、中学校教諭、久保政義氏の二名が、二十五年勤務の表彰を受けられます。私どもは両氏の労苦を感謝し、その表彰を心より祝したいと存じます。また、本年は五名の現職者を失い、一名の名譽教授と二名の社友を失いました。すなわち、一月二十四日には大学総務部の上野義一氏を、四月二十一日には、元大学長、大下角一氏を、五月十五日には、経済学部教授、石井寛爾氏を、五月三十日には香里高校、堀江統氏を、八月二十四日には、女子大学職員、山田健三氏を失いました。また三月十日には、大学名譽教授、中川精吉氏を、七月五日には社友、森村市左衛門氏を、十一月二十二日には社友、楠崎定吉氏を失いました。

私どもは謹んで、これらの人々の学園に対する多くの功績を感謝し、その冥福を祈りたいと存じます。

(同志社総長)



レバノンの 国づくりと教育

湯浅 八郎

未知の国

とわに青しと愛賞されている地中海の東海岸に沿って、面積は極めて小さいが歴史は極めて古いレバノン共和国がある。近年はその首都ベイルートが国際空路の重要中継空港であるため、この地を通過する邦人の数もふえはしたものの、レバノンそのものは、大多数の日本人にとっては今なお縁遠い未知の国といわなくてはなるまい。しかしレバノンは現在現代化の歴史的課題ととり組んで、新しい国づくりに専念している国家の一つなのである。

レバノンの歴史は太古に遡るといいうるのである。殆んど七千年の昔から歴史に出てく

る。シドンやバビロスやパールベックやその他の地名は旧約聖書に出てくるものもある。

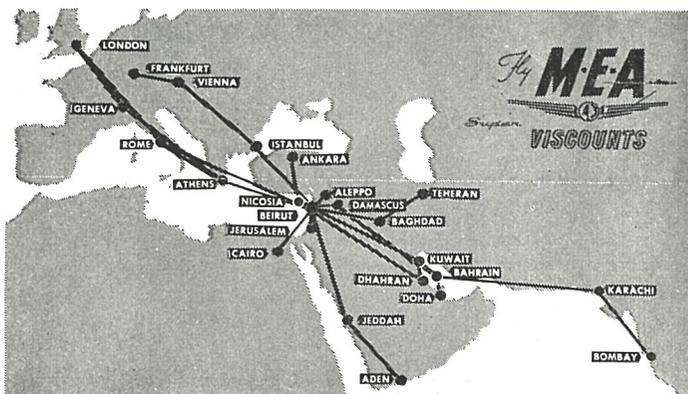
観光地として有名なこれらの地域にはエジプト、ギリシャ、ローマ、ビザンチン、モンゴールなど、下つてはヨーロッパ文化や交渉の遺跡が層をなして発掘され保存されている。

近世二十世紀の当初まではオトマントルコ帝国の支配下にあつたのであるが、第一次世界大戦でトルコ帝国が崩壊したため、一九一八年国際連盟はレバノンをフランスの委任統治としたのであつた。そして第二次世界大戦中フランスと条約を結んで独立国家となつたのである。このフランス委任統治時代に仏国政府は政治、産業、宗教、教育、文化の諸方面

に深大な感化を移植したが、それが今日レバノンが申近東のアラブの世界で随一の文化国家と称せられる原因をなしていることは否定し難いところである。

レバノンの人口

レバノンを特色づけるものの第一は、その人口構造である。一億千四百万人と概算される人口は、その約半数六百万人がキリスト教徒であり、約五百三十万がイスラム教徒である。この事實は主としてイスラム教を信じているアラブ民族中さらに驚嘆に値するものといわなければならない。この一事だけでもレバノンが他のアラブ民族国家群中ユニークな存在である理由となりうるであろう。さらに面白いのはレバノンは近東と北米合衆国との二カ所に存在すると称せられるほど、多数のレバニースがアメリカに移住していることである。そしてこのアメリカ在住のレバニースの故国送金がレバノンの国家財政上重要な要素となつていたのである。レバノンの人口構成を複雑化しているものに百万以上にのぼる避難民団の存在がある。彼らの大多数は戦後ユダヤ人によるイスラエル国の建設によつて祖先伝来の農地を追いつてられたアラブ農民



レバノンへの航空路

たちや、エルサレムや大小の都市や村落で商売をやっていたアラブ人の商人たちなのである。一九一七年のバルフォア宣言は、周知の通りパレスティナ国内のアラブ人の権益の確

保を条件として、ユダヤ国イスラエルの建国を認めたのであったのであるが、第二次世界大戦後いよいよイスラエル建国となると、かなり非人道的な強圧手段によってアラブ人達は強制逐払いで疎開を余儀なくせられ、数百万にのぼる避難民が近隣諸国に逃避するのやむなきにいたつたのである。彼らの多数は月一人宛米貨二弗という極微の救済金を、国際連合の難民救済資金から恵まれて文字通り最低の生活を今日もなおつづけているのである。無教育で技術を身につけていないこれらの避難民は、どこにおいても招かれざる客として敬遠せられ恐れられ嫌悪されているのである。このような外来の異分子が百万人以上も小さな国、産業の発達していないレバノン国に入り込んでしまっているのである。これでは経済的にも道德的にも政治的にも問題になるのは当然であり、必然であるといわなければならない。

政治と宗教

レバノンの第二の特色は、政治と宗教との結びつきである。レバノンの憲法は、その一院制の国会の議員数をキリスト教とイスラム教の各宗派の信徒数に比例して配分して一定

しているのである。それ計りではなく、大統領はキリスト教徒でなければならず、しかも同じキリスト教でも马龙ナイト派に属する信者に限定せられているのである。同様に国会議長はシーアイト派のイスラム教徒、内閣首班は同じくイスラム教徒であるが、ただしスンナイト派でなければならぬ。キリスト教は全人口中最多数を占めると称せられるが、その中で新教徒は恐らく二万人以下の由である。しかし文化的にはこの少数グループの中に有力な指導者の存在することを見逃してはならぬ、かつて私が国際基督教大学の教授として招聘しようとした哲学者、政治家、チャールズ・マリツク氏のごときはその一人であるが、彼の国際連合における活躍は知る人ぞ知るである。いづれにしてもアラブ国家群中唯一のキリスト教国レバノンの近代化に最大の影響を及ぼしたフランスがローマ・カトリック国家であることは、レバノンの性格を理解する上に必要な一つのポイントといえるであろう。

石油資源

第三の特色は昔から貿易に依存する国家経済である。地中海に覇をとらえたフィニキヤ

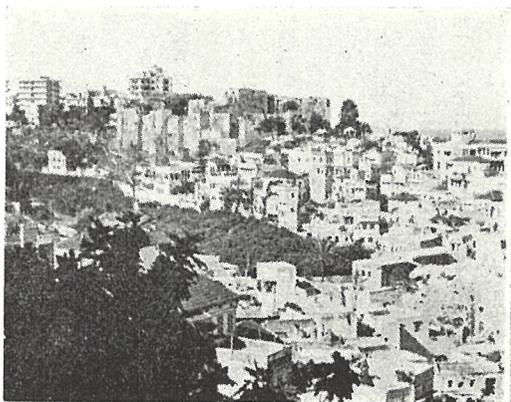
商船の活躍は古代史を飾るものである。爾來これという産業をもたぬレバニースは主として生計を立ててきたのである。困貧しきが故に多くの移民を北米に送り、今日彼らの故国送金が重要な財政要素となつているのもこのためである。さらに最近は航空網の発達にもない観光地として、また避暑地として異常な発達を示している。ブルー・メデイタレニアンの海岸沿いのドライブ・ウエーにそつて近代的な高級ホテルやデラックス・アパートが次ぎ次に建築されている。まさに建築ブームの観がある。それと言うのも近年サウジアラビヤやクエートなどで石油資源の開発によつて巨大な富がこれら砂漠の事業家の手に入ることになり、近東一の近代都市ベイルトは彼らにとつて最適の消費娯楽都市となつたためである。一年夏冬の二季節しかない近東、別して砂漠地帯の成金の富豪連が最も安全で、便利で、快適で、しかもアジア・アフリカのものと欧米的なものとの共存する人口五十万のベイルトに別荘を建て子女の教育に志さずとも無理からぬところであろう。このような富の導入は国家の財政にプラスする面もあるが、同時に風紀の頹廢、民族間の

軋轢などマイナスの面もあることを指摘するまでもないことである。

調査団に参加して

私がレバノンに行ったのはもう足掛け五年も前のことになるが、レバノンとシリヤとにあるキリスト教主義の教育機関の現情調査をして、その改善強化を計るため北米の長老派が組織した国際調査団の一員としてであった。団長は黒人で教育行政に練達のフランク・ウィルソン博士、団員としては仏教団タィでキリスト教主義教育に従事していたトムソン教授、シンガポールの米人神学者スミス博士、米國YWCAの指導者エリオット女史、パキスタンの最高女子大学ケネーヤード・カレズの学長マンガット・ライ女史、それに日本人として私。いずれもキリスト教主義教育の経験者であるが、その背景や専門や人種にはそれぞれ特色をもつた人達であった。この顔ぶれを見るだけでも明日の世界の教育の課題が暗示されている感があるように私は思ったことであつた。私はもとよりここで、この調査団の報告を書く考えではない。これはすでに米國において発表済みである。ただ調査のため私たちはレバノンを南はシドンから北

はトリポリまで、シリヤは旧都アレポへと、大学、神学校、高等学校、小学校など男女の教育機関を親しく訪ね、施設や設備や教科課程やあらゆる教育統計や資料を調査し、授業の現場を視察し、校長初め多くの教職員に集団で、また個人で面接し、さらに卒業生やその地方の部外有力者をインタービューし、またつとめて学生生徒にも接し、寄宿舎に泊つ



レバノン第二の都市 トリポリ

て学生生活を体験することに努めなどしたのであった。決して通り一辺のいわゆる公式調査ではなかつたのである。そして団員の一人一人がそれぞれの責任分野を保持して調査結論したもの必ず全体会議で審議討論することにした。そしてその結果を調査の対象となつた学校の責任者とその背後にある宗派の代表者に示してさらに検討審議した上で報告書を書き上げたのであつた。このような工作過程において私は初めてレバノンの教育問題の全貌に接し、問題の本質を理解し、したがつてその解決に関して妥当と思われる考案をまとめえたのであつた。ここではこの仕事に関連して私が見たり聞いたり考えたり考えさせられたりしたことを思い出すままに書いてみようと思ふのである。あるいは目下わが国においてもとなえられてゐる国づくりや人つくりの問題にならぬかの示唆を提供しうるかもしれないと思ふからである。

宗教と教育

第一に問題となるのは宗教と教育との関係である。宗教がいかにレバノンの政治を規制しているかについてはすでに述べた通りである。人口の約半分は厳格な戒律を墨守し、絶

対に他宗教に改宗することを許されぬイスラム教徒である。したがつて学校教育は、その課程においても、行事においても、学生生徒の活動や指導においても、イスラム教徒の子弟に関しては一種特別の考慮を払うことを余儀なくせられてゐるのである。他方人口の他の半分は主として旧教に属するキリスト教徒であつて、彼らもまたキリスト教徒としては統制と訓練には極めて忠順な信徒であり、その多くは新教の信者をさえ異端者視するよう教え込まれてゐる人達である。だからイスラム教徒と旧教徒とは常に水と油のような異変的存在であつて、政府としても個人としても、この現実を無視しては教育効果を挙げることは不可能なのである。ある意味での教育制度の二元化の強制であり、教育哲学上の矛盾や対立を温存する妥協でもあるのである。このように宗教的反感や相剋や、さらに深刻な人間観や風俗習慣の相違が、レバノンの教育問題をいかほど複雑化し難解化してゐるかは想像に余るものがあるのである。この点日本とは対照的なものを感じるのであるが、周知の通り、明治、大正、終戦までの昭和の日本の教育は、いわば神道に結びついた政治に左右

されたものであり、キリスト教徒は学校生活においてもかなり異端者的差別取扱いをうけたのであるが、幸にして時代の推移と文化の進展とは、現在わが国では殆んど世界の宗教という宗教が混在併存しているにも関わらず、それらは一応社会的にも思想的にも風習的にもさしたる対立や反感や相剋は感じられなくなつており、いわばそれぞれ落ちつくところに落ちついてゐるかの観があり、宗教が教育を圧迫したり、教育が宗教と抗争したりすることがないのが現実である。もっともこのよ

うな一見万教協調の姿にも実は深刻な問題が潜在してゐるであらうし、よく耳にする万教合一の提唱にも必ずしもそう安直に共鳴しがたいものもあるにはある。そしてこのことはまこと正しい意味においての人づくりは、宗教を無視しては不可能であると考えるものにとつては重大な研究課題であるはずである。いずれにしても宗教と教育との問題に関する限り、レバノンと日本とは明らかに対照的な特色をもつものといひるのである。

フランスの影響

第二はフランスの影響である。先きにも述べたようにレバノンの近代化は主としてフラ